
紅月

弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅月

【Nコード】

N7846S

【作者名】

弥生

【あらすじ】

妹に刺されて死んだ、清川きよかわ 瀾らん。彼女を待っていたのは、地獄の管理人“閻魔様”……ではなく。マントに身を包んだ怪しげな集団だった……。

プロローグ（前書き）

初心者ですので、誤字脱字や、表現の間違いその他諸々、多々あると思われませんが、温かい目で見てください。

流血シーンを多々含みます。

自己責任でお願いします。

プロローグ

目の前に広がる、赤。それが自分の血だと言う事に気づくのに、そう、時間はかからなかった。

「きゃー！ー！！」

聞こえる悲鳴。

「何やってんだ！早く救急車を……！！」
聞こえる怒声。

それすら聞き流せるくらい、私の眼は彼女に向いていた。

「あは……あはは……あははははははははは……！！」
狂ったように笑い続ける私の妹。

私は、妹に刺された。見た目がそっくりな私の妹。

理由は、……私が彼女のボーイフレンドを取ったから。

私の名前は、清川きよかわ 瀾らん。妹の名前は、鈴りん。

私たちは双子だから、見た目がそっくり。

髪の色は私が黒で、鈴が薄茶。これは遺伝上の問題だと思う。

だって、お父さんが日本人で、お母さんが、日本人とイタリア人のハーフ。おばあちゃんが、イタリア人だったりする。

性格は……どうだろう、良く解んない。ただ、鈴の方が積極的だ。

だから、生まれてこの方十数年鈴からは色恋の話は出るけれど、私から出たことは無かった。

そんな時だ、鈴の彼氏が私の事を好いたと知ったのは。私は、知らないふりをした。気づかないふりをした。鈴との関係を壊したくなかった。でも、ダメだった。鈴の彼氏は、彼女と居る時私の話ばかりしたらしい。

行き着いた場所

ごめんなさい。…………おねえちゃん…………

がした。

声が…………聞こえた気

暗闇の中、私はそこに佇んでいた。
何時からそこにいたのかは解らないけど、気づいた時にはそこに
いた。

「……」
周りを見回しても

黒

クロ

くる

永遠に続く……闇。

「何も見えない……？」

ふと、自分の手を見る。

見える。

周りを見る。

何も……

「……見えない。」

目を瞑ってみた。

「……。」

しばらくそうしていると、目を閉じているはずなのに仄かに明かりが見えた気がした。

地下にある一室。窓のないこの部屋を照らし出すのは、壁に掲げられた四つの蝋燭と部屋の中央にある魔法陣。その発する輝きだけ。その魔法陣を囲むように佇む男が六人。全員、黒いフードに身を包んでいる。

男たちの視線の先には、魔法陣の中央に静かに眠る少女が一人。

一人の男が魔法陣に向かって手を伸ばすと、魔法陣は一層輝きをました。

「……つう」

少女はうめき声を漏らすと、臉を震わせ目を開けた。

「早く見つける！！逃げられてしまつては……」

「解っている。あれ程の極上の娘。そうそういるものではない。」

声が響く。それは地下だからか、それとも……

清川 瀾きよかわ らん。彼女は男達に隠れるように、地下にある一室に身を寄せ
ていた。

「どこなの……ここ……」

私は、鈴すずに刺されて……それで……

「死んだはずなのに……」

「そお。お前は死んだ。」

ジャリ

「!?!」

瀾が前を向くと誰も居なかった筈の場所に人が立っていた。

「誰？」

「俺は、……否、今はやめておこう。」

男は欄をひたと見据えると扉を指差した。

「よお」

「？」

扉の前には……何がいた。

「えっ？なに、あれ？」

「あいつは、アク口。」

「アク口。」

「そ、俺の相棒だ。そいつが俺の元まで連れて来てくれる。」

そう言うと、男はフツと消えた。

「行くぞ。」

クルリと背を向けたアク口を、欄は急ぎ足で追いかけた。

出会いと……

アクロの後を追って、右へ左へ……。

さつきから、誰にも合わない。

アクロはちらりと後ろを振り返ると、息を上げている欄を見て目を細め

「もう少しだ。」

その声をかけまた前に向き直った。

あの部屋から出て何分経っただろう。やっと光が見えたと思ったら、そこは欄の知らない場所だった。

「どこよここ……。」

欄は、眉間の皺を増やしながら辺りを見回した。

「おい。早くしないと追手が……。」

「いたぞ!!」

「チッ」

アクロが促すまでもなく、周りを大勢の男たちに囲まれてしまった。

「逃げ場はないぞ。大人しく捕まるんだな……。」

じりじりと包囲を狭めてくる男たちに、アクロは戦闘態勢をとり一声鳴いた。

ゴウ

辺りを風が渦巻きその風で目が開けられなくなる。それは欄も男たちも同じこと

「ずいぶん派手にやってるね。」

少し前に聞いた声が欄の鼓膜を揺さぶった。

それと同時に風が止み、目の前にいた男数人が力無く倒れた。

「おせえーよ。」

「しょうがないだろう。距離があっただ。」

男達が倒れた後に立っていたのは、金色の髪と髪よりかは幾分柔らかい色をした目を持つ青年だった。

青年は欄に近づくと「俺は、カイトって言うんだ。よろしく。」と薄く微笑んで男達に向き直った。

「アク口。」

「解ってる。」

青年・カイトは欄を抱え込むようにしてしゃがむと、凄まじい熱気と音と共に周りを炎が取り囲んだ。

異世界と言う存在

遺跡のある場所から森の中を少し歩くと小さく開けた場所がある。そこに欄達は来ていた。

「ここで良いだろう。」

カイトはそう言うつと腰を下ろした。それに習うように欄も腰を下ろし、アクロも地に足を下ろした。

「さて、改めて自己紹介しようか。」

「あ・・・そう、ですね。」

欄は姿勢を正すと、三つ指をついて頭を下げた。

「このたびは、助けて頂きありがとうございます。ごさいました。」

ワタクシ
私清川 瀾と申します。」

「頭上げてよ。俺は、カイト。宜しくね、欄ちゃん。」

「俺は、アクロだ。・・・つか、そのかたつ苦しいのやめる。」

欄は、アクロのその言葉に苦笑すると「解った。」とうなずいた。

「で、お前これからどうすんだよ。」

「あー・・・どうしよつか？って言うか、その前に一つ聞くけどここどこ？」

カイトは、その言葉にクスリと笑うと「そう言えば、まだ言っただけ無かったね。」そう言っつて、近くに落ちていた木の棒を手を取った。

「ここは君のいた世界とは違う。異世界と言うやつだ。」

「異世界・・・」

「君は実の妹に殺された。なのに・・・」

「目が覚めたらあそこにいた・・・」

欄は、カイトとアクロの言葉に俯いてしまった。

「なぜ君があそこにいたのか。それはね、」

「それは私が呼ばせたからだ。」

突然第三者の声が聞こえたかと思うと、欄達の目の前にがたいの良い男が降り立った。

町

- ヒュルルル

風が渦巻く。広場を中心として草木が燃え、一部が凍りつき、獣たちは逃げ出した。

男が強いことは見ていた瀾にも解っていた。アクロもカイトも全身全霊をかけて挑んだ。だが、負けた。ゆっくりと男が、近づいてくる。

次は私の番。

そう思いゆっくりと目を閉じたが、一向に衝撃が来ない。目を開けると男は目の前で歩みを止めていた。

「弱いな。どいつも、こいつも。弱いくせにはむかつて来る。」
そう言った男の目は冷え切っていた。

あれから私達は場所を変えた。又、何かあるといけないから。アクロとカイトの怪我はひどいものだった。

なぜ私は何もされなかったのか。そして、『お前をこの世界に呼んだのは、この俺だ。』この言葉。どうゆう意味なのかよく解らないけど……。

「気にすんなよ。」

考え込んでいた私を見かねて、アクロはそう声を掛けて来た。

「うん。」

「気に病む必要は無い。」

確かに、あいつの言っている事はあっているだろう。だが悩んだ所で何もならん。だったらまずはあいつを探し出し、聞きだせば良い。そうだろうか？」

「そうそう。カイトの言う通りだぜ。」

「でも……」

確かにこの二人の言う通りかもしれない。それでも私は怖かった。嫌でも思いつき出されるさっきの出来事。血濡れた二人。チロチロともえる植物。凍った大地。

つめたい。何もかも拒絶した様な、それでいて受け入れる様な、温かい手とは反対の、冷たい。冷え切っているあの青い目。あれが怖かった。まるで全てを見透かされそうで。又、あの時みたいに。

……あの時？今、私は何を思った？

「まずは、あの男についてだな。俺達は、あの男について何も知らない。そこで、情報を集めようと思う。」

「この近くに町があったな。そこで、少し聞き込むか。」

「町？人がいるの？」

蘭のその言葉にアクロはプルプルとこぶしを震わせ思いつきり叫んだ。

「人がいなかったら、カイトはどうなんだあー!!」

「目の前でしゃべってんのは人だろ？人じゃないのか!？」

否、ドラゴンです。とは、口が裂けても言えなかった。

あれから町に来た私たち、町は私の住んでる世界とはやっぱりちがくて、少し落ち着かないけど私はこっちの方が好きだったりする。

アクロはあれからずっと怒ってて、ぐちぐち言ってる。私が何よりも驚いたのは、ドラゴン（アクロ）が喋っているも別段平気だと言う事。（ドラゴンは、そんなに珍しくないらしい。）

「って、俺の話、聞いてんのか!？」

「あー。はいはい。」

なんか、こっちに来てから神経図太くなった気がする。

夢

水が垂れる音がどこからかする。

重たい瞼を開く、今まで横たわっていたベッドはなく木造の屋根も見えなくて、ただ、そこにあるのは満点の星空と青々と茂る草原。零れ落ちそうなほど大きい満月。その下にあるのは、月から垂れる水を受け止める大きな大きな湖。

必然的にその光景に目がいく。なんだか、ひどく、
「喉が渴いた。」

水を求め湖に近づくと、湖を覗き込めばそこにあるのは水ではなく

赤い

紅い

アカイミズ……

吃驚して動けないでいると、水に映し出されるさまざまな映像。

怒ってるアクロ

苦笑するカイト

それを見て笑う私

私

わたし

ワタシ・・・・・・・・

血に染まり死にゆく・・・

赤い

紅い

アカイワタシ

それを見た瞬間、心が悲鳴を上げたかのようにキリリと痛む。

ゴポリ

その音に顔を上げると月からコポコポと湧き出る赤い水。

「また泣いたの？」

後ろを振り向けばさつきまでは居なかった筈の、女の子。長い黒髪、少し吊り上った大きな目、赤い瞳。

どこことなく、鈴に似ている彼女。ちがう。鈴じゃない、この子が似てるのは・・・

「私・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・さあ？」

その問いに対して、女の子は軽く笑い首を傾げて見せた。その笑いは誤魔化すと言うよりも、嘲りに近い気がした。

「死が怖いのか？」

「怖くない。」

私は一度死んでいるのだ。怖いわけがない。

でも、彼女は笑った。私を嘲る様に。挑発するように……。

「じゃあ、なんで泣いてるの？」

「泣いてない。」

「どうして、私とあなたが似てると思ったの？」

「……」

「どうして……？どうして似てると思った？」

「……」

私の胸に指を突き付け彼女は言った。

「魂が一緒なのよ。」

ふいに彼女は離れた、今まで一度も見せなかった、微笑みをたたえて。

「またあえるわ。」

その言葉を最後に私の意識は暗転した。

赤

ザアアア

窓の外では雨が降っている。
最近では繰り返し同じ夢を見る。

大きな月

溢れ出る赤い水

赤い湖に映る私………

私のように、私じゃない、ワタシ

二人には相談したくても出来ない。否、出来ないんじゃない。したくないんだ。

何と無く、私自身で解決しなくちゃいけない気がしたんだ。

二人も私がおかか悩んでいるのに気付いて、情報収集を二人でやってくれている。

あの男………私について、何か知っているようだった。

何を知っているというの？

知らない

知りたいとは思わないの？

知らない

………

.....

解らない。あの男が何を知っているのか、夢に出てくる彼女は何者なのか.....。そういえば、最近夢の中で彼女を見ない。見たのは、最初の一回だけだ。

自問自答を繰り返すうちに、グルグルと回る思考。意識は暗転していき、いつの間にか眠りについた。

ピチヨン

真っ赤に染まる空間に一人、漂う。
見回してみても赤いその空間。手足を動かせば.....動く。

ペタペタ

どこかを歩いているようなそんな感覚。ふと、前に何かがあるような気がして手を伸ばせば、コツリと、何かに手が当たった。

「鏡？」

よく見れば、赤の中にいる自分が写っている。

でも、

「あなたは.....」

違う。

「久しぶりね。」

目の前の、鏡と思っていた所には前にあった、女の子。

巫女

長い黒髪

少し釣り目の大きな目

赤い瞳

ガラスの向こうに映る、彼女。

「答えは出たの？」

「答え……」

「そう、私とあなたが似てる。……その答え。」

「……」

魂が似てる。そう彼女が言った。

……その……答え。

つまり……

「私は、」

あなたの……

「あなたの、生まれ変わり？」

彼女は、唇の端を吊り上げニイと笑った。

「正解。」

ガラスをするつと通り抜けて出て来た彼女は、私の唇に自分の唇を重ねた。

「これで、記憶が戻る。」

「き……おく……」

「全てが戻る。……私は……消える。」

「えっ……!?!」
割れるような頭の痛みに、揺れ動き、溶けるように消えていく世界は辛かった。

目を開く。木目のある、天井。

「ああ。」

やどか……。

アクロと、カイトは戻って来たのだろうか？

ル・デイに、会ってはいないだろうか？

この町に長居はできない。その町は巫女を嫌う。

今夜にでも出た方が良さだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7846s/>

紅月

2011年11月7日11時25分発行